

図書案内

2024年 3月号

青春

3月となり今年度も終わりに近づいてきました。今月のテーマは「青春」です。中学時代の仲間との何気ない日々が懐かしく思い出されるように、あの時は青春だったと時が経ち日常ではなくなってから初めて実感することがあります。読書を自分の知らない世界を知るきっかけだと考えると、年度が替わり環境が変化するこの季節に青春が題材の本を読むことで、あなたの過去に新たな解釈を見つけられるかもしれません。

『時をかける少女』／筒井康隆



2006年に細田守監督によって映画化された、日本を代表するSF作品の一つ。とある女子中学生、和子の身に突如不可解な能力が備わり、クラスメイトと協力して謎を解明していく表題作など、三編が収録された短編集。

昭和51年の作品であり、語尾や表現に時代を感じる場面もある。しかし、全作を通じて若者が主人公であり、彼らの考え方、行動には共感できる部分も多いはず。映画を見たことがある人も、そうでない人も、是非一読してほしい作品。テレポーテーション、タイム・リープ、火星移住といった単語が何度も登場するので、SF好きに特におすすめ。

「そうだ！わたしはタイム・リープしたのだけ。きっとそうだわ。」



『犬がいた季節』／伊吹有喜

私は普段小説を読みませんが、一番好きな小説です。進学校の八高に捨てられたコーシローという犬の目線で生徒の学生生活が描かれています。コーシローが現れたことで、美術部三年生同士の優花と光司郎の関係が変化していきます。卒業しそれぞれの道を歩む二人と、代々コーシローのお世話をしていく八高生の姿が、暖かくて優しい光とともに描かれています。そして物語の最後には美しい仕掛けが隠されているのでぜひ読んでみてください。

『ところがすぐに文頭の「However」という単語で詰まった。すかさず「永遠にする方法」と訳すと、優花が不思議そうな顔をした。』

『夜のピクニック』／恩田陸



舞台である北高では夜通し約80キロの道のりを歩く歩行祭というイベントがあり、物語は3年生の融と貴子、更にはその友人たちが中心となって展開される。歩行祭は3年生にとって最後の行事であり皆が特別な思いを抱えて走る。そんな中で融と貴子の間には隠された秘密の関係性があり、二人の仲はぎくしゃくしていた。貴子もまたこの関係にけりをつけるためにある誓いを立てて歩行祭に臨む。二人の友人たちの協力もあり、二人の関係は歩行祭を通して徐々に変わってゆく。複雑な人間関係が絡み合い、デリケートで重い問題も出てきて、決してキラキラした青春ストーリーとはいえない。しかし、高校生のリアルな人間関係に対する葛藤や、それを乗り越えて成長する姿はきっと皆さんに多くの勇気を与えてくれるはずだ。

「何かの終わりは、いつだって何かの始まりなのだ。」

『君にさよならを言わない』／七月隆文



事故の後遺症として幽霊が見えるようになった僕は、初恋の幼馴染「桃花」と出会う。今は亡き彼女との日々幸せを感じるも、彼は遂に決意する。初恋の娘との再会、そしてその後の青年の幽霊譚。

昔と変わらない、初恋の子の笑顔だった。

そもそも青春とは？

古代中国での陰陽五行思想において、「春」には「青」が当てられており、他には「夏」に「朱」、「秋」に「白」、「冬」には「玄」が当てられています。そしてこれらをそれぞれ「青春」、「朱夏」、「白秋」、「玄冬」という風に分かれています。これはおそらく我が国が体育大会の格闘のモチーフにもなっていると考えられます。ちなみに陰陽五行思想における二十四節季では清明という四月五日からはじまる季節に、古くから中国ではこの季節に野山へ出かけ春の草を満喫する習慣があり、そのことを踏青と呼ぶことから若々しい様子を青いと比喻する様子がうかがえます。陰陽五行説では、「春」は15歳から29歳を指し、これが転じて現在の日本の主に学生時代を指す「青春」文化が生まれたと考えられています。なお、日本では夏目漱石の前期三部作「三四郎」・「それから」・「門」のうち、最初の「三四郎」のヒットと共に定着したと考えられています。

(参考文献:『現代に基づく陰陽五行』／稲田義行 日本実業出版社)